

大学と附属学校園との ESD を核とした共同研究について

松田 孝史

1. はじめに

奈良教育大学には、幼小中 3 つの附属学校園がある。2007年に大学が日本で最初にユネスコスクールに加盟を認められ、その後各附属学校園も加盟した。これにより、大学全体としてユネスコが推進する理念の実現を目指す、という共通の教育基盤を持つこととなり、それが本学の特色の一つとなっている。

また、大学と附属学校園が連携して、ESD ティーチャー養成講座を開催するなど、ESD(持続可能な開発のための教育)の普及啓発に力を注いでいる。

2. ESD の理念を生かした共同研究

ユネスコスクールである本学では、ESD を特色ある教育活動の一つとしている。ESD は将来の社会の在り方に対する価値観の変容を促す教育であり、将来世代を意識した行動、生態系や自然環境の保全、人権や文化の尊重、多様性の尊重などの価値観を育み、協働して問題解決に参画する人を育てることを目指している。また、グローバルな課題とローカルな課題の関連を見出し、それを自分ごと化することで具体的な行動ができる人を育てることも目指している。

以下に紹介する、特に ESD を核とした共同研究と実践は、学習者の中に思考や行動の変容を促し、望ましい社会づくりに積極的に参画する精神を涵養することに資するものとなっている。

3. ESD を核とした共同研究の例

(1)地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト【大学と附属幼稚園(2019)】

- ・奈良教育大学ユネスコクラブの学生が3回にわたって附属園児に対して行ったプロジェクトである。
- ・園児に対する ESD 啓蒙活動であるとともに、学生自身にとっても、地域と連携した教育活動のノウハウの獲得とそのスキルを高める機会となった。
- ・教員と学生が協働して教材内容や指導方法について検討し、園児が興味を持つよう動画を作成するなど、デジタル教材を開発した。

(2)「新しい豊かさ」に焦点を当てたESD授業開発－世界農業遺産「にし阿波の傾斜地農耕システム」の現地調査を通して－【大学と附属小学校(2018)】

- ・2018年に世界農業遺産に指定された「にし阿波の傾斜地農耕システム」(徳島県西部)を題材にして、ESD 教材化を目指したものである。
- ・①地域の持続可能性、②他地域とのつながり、③食料生産と食文化、を教育内容として設定することにより、小学5年の社会科「高い土地の暮らし」の中で扱うことを提案している。
- ・当地域が限界集落であり、高齢化・過疎化という問題を抱えながらも、地域食や景観、人々のつながりをアピールすることで地域の良さを発信し持続可能性を図る姿を通して、「新しい豊かさ」につい

て学ぶ内容となっている。

(3)野外生物学に基づく体験学習の指導法に関する研究—シリーズ観察会「ムシムシ博士と公園を探検しよう！」の実践から—【大学と附属小学校(2018)】

- ・従来型の、単に「自然に親しむ」ための遊びとは異なり、専門家を交えて生物の生態に詳しく迫り、子どもの興味を引き出す実践を通して、身近な地域の環境や生態系循環の持続可能性を学ぶためのプログラムを提案した。
- ・OBIS(野外生物学の指導案集、<http://outdoorbiology.com/>)の活動モジュールを参考にして、学校での教育内容の多様化を図り、また ESD につながる教材化を目指した。
- ・関西学研都市にある「けいはんな記念公園」をフィールドとして、5つの題材で、のべ9回のイベントを実施した。

(4)「ひとに出会う」を通して学ぶ ESD の価値実現の教育実践の構想 I・II—ESD の価値観の根っこに迫る「総合的な学習の時間」の具体化に向けて—【大学と附属中学校(2018・2019)】

- ・附属中学校で従前から行われてきた各種実践(漁家訪問、奈良めぐり、沖縄修学旅行など)においては、教科の授業や調べ学習による事前学習、現地での調査と確認、事後学習、という「学び方を学ぶ」学習方法に力点が置かれてきた。
- ・今回それを補完し、学習者が主体的に ESD の価値の実現に向かえるよう、「地域でひとに出会う」ことを主眼として、そこから「問い」を見だし、机上の学びに終わらず、学習対象を「自分ごと化」するための方法を提案した。
- ・1、2年生合同で8つのコースを設定した。コース設定の際には、SDGs も意識しながら「ひとに出会う」場面を取り入れ、協同的な学びが実現するよう考慮した。
- ・ひとに出会う学びを通して、生徒はより主体的、内発的に社会にかかわる意義を実感し、「自分が気づいて動ける ESD」に近づけることができた。

(5)ESD の理念を含んだ特別の教科道徳の実践—学校行事を通しての考察—【大学と附属中学校(2020)】

- ・特別の授業道徳に、社会問題や環境問題、文化の多様性、人権の尊重など ESD の理念を取り入れた「ESD 道徳」の考え方とその実践例を提示した。
- ・「自分はどうしたいのか」という問いを中心にして、生徒と教員が共に悩み答えを求めらる中で、考えを深める手段としての「感化」と、それに至るための「感性」の涵養を重視している。
- ・奈良の墨や書道を題材にして、関係する人々の話や体験活動を通じて、地域に根ざす文化と自然や人との関わりについて再確認し、それらに対する「感性」を深めることができた。

4. これからの共同研究

上記5つの共同研究の他にも、さまざまな研究を通じて ESD の推進に取り組んでいる。今後も、大学においては ESD を核とした教員養成の高度化を、また附属学校園においては ESD の理念を生かした学校づくり、人づくりを実現するべく、教科の枠に縛られず幅広い分野で共同研究を進めていきたい。

共同研究は、大学と附属学校園の教員のどちらからでも企画立案し互いに協力要請を申し入れることができ、研究活動における自由度は高い。また、研究の成果は、毎年発行される「次世代教員養成センター研究紀要」に掲載され、全学で共有がなされている。しかしながら、関係するメンバー以外には事前にど

のような研究が行なわれようとしているかなどについて十分共有ができていないとは言えない。今後は、それらを有効にコーディネートできる体制・組織が必要であると考え。それにより、大学と附属学校園の教員が協働できる機会が増え、大学と附属学校園の機能強化を図ることが期待できる。

さらに、共同研究を行う際には、地域の教育機関や公的機関、また ESD・SDGsに取り組む人々や団体とも連携し、第三者の知見を得ることにより、さらに広がりのある研究活動へと繋げることができ、地域を教材としてより深く活用することも可能になると考える。

(奈良教育大学附属中学校長)